

知られざる独立系時計師 パウル・ゲルバー の仕事

坂口綱男—写真
Photo/ Tsunao Sakaguchi
古川直昌—取材・文
Text/ Naomasa Furukawa

フランク・ミュラーやフィリップ・デュフォー、アントワーヌ・プレジウソなどの活躍でわが国でも独立系時計師と呼ばれる存在が広く知られるようになった。未だ日本では無名ながら、その高度な技術にかけては彼らと双肩する時計師のひとりとして、われわれはチューリヒ在住のパウル・ゲルバーに注目した

パウル・ゲルバーという名前を聞いて即座にピンとくる人がもしいたら、その人は相当の時計マニアか、あるいは関連雑誌の編集者やライターに違いない。

当然だ。彼はここ日本ではまったく無名の存在であり、そもそもその仕事を知る手だてすらほとんどない。メーカーからの依頼による設計や開発が表に出ることはまずないし、オリジナルの製品も年産わずか20個足らず。もちろん日本で入手することはできない。



1892年にスイスの時計師、ルイ・エリゼ・ビゲが開発しながら完成途中となっていたエボロシェを100年後の1992年にフランク・ミュラーが腕時計として再生。グラン・ブチ・ソヌリやミニッツリピーター、永久カレンダー、温度計などを備える腕時計グランド・コンプリケーションの最高峰モデル。パウル・ゲルバーは95年、このムーブメントに独自のフライング・ツール・ビジョンを新たに加えることに成功した

GERBER